

2022年7月10日（聖霊降臨後第5主日、特定10、C年）

牧師メッセージ

「誰が隣人に「なった」か」

（ルカによる福音書 19:25-37）

司祭ヨセフ太田信三

ある律法の専門家が、主イエスを試そうとして質問することから今日の福音は始まります。この問答を通して、主イエスは大切なことをわたしたちに示してくださいました。この律法の専門家は、「神を愛し、隣人を愛する」という律法の核心を知っていました。主イエスからも「正しい答えだ」と言われます。しかし、「それを実行しなさい」と言われた律法学者は、「隣人とは誰ですか？」と主イエスにさらに問います。実は、ここからがとても大切なやり取りになっていきます。なぜなら、律法の核心を知ってはいても、それを知っているだけではまったく意味が無いからです。

さて、「隣人とは誰か」と問うた彼の発想は、「愛する」ということを実行する前に、まずは隣人を特定し、その特定された人だけを愛そう、というものです。それは果たして正しい姿勢でしょうか。それが彼に問われる事になっていきます。ユダヤ人である彼の愛する対象、隣人には、当然サマリア人は入っていません。なぜなら、ユダヤ人とサマリア人は歴史的に強く対立し合ってきたからです。そして、彼にとって隣人とは、レビ人や祭司といった、正統なユダヤ人＝身内でした。しかし、主イエスが話された、「眼の前に瀕死の人がいるのに、祭司とレビ人は通り過ぎ、サマリア人がその人を助けた」という話しは、まったく異なる隣人を彼に知らせました。主イエスは彼に問いかけます。「だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」彼は「サマリア人」をよほど嫌悪していたのでしょう。「サマリア人」という言葉を口にするのを拒むように、「その人を助けた人です」と答えたのです。

「誰が隣人であるか」と問うた律法学者に対し、「誰が隣人になったか」と問うた主イエス。ここに鮮やかに違いが表されています。祭司やレビ人は、瀕死の人が目の前にいても、その人を思うよりも、その危険な場所から身を避けることを考えました。しかしサマリア人は瀕死の人を憐れみ、近寄って介抱し、この人に尽くしました。憐れみとは、相手の痛みや悲しみへの痛みを伴うほどの共感であり、思いやりです。それは、虐げられた人や病にある人を見つめる主イエスの思いであり、放蕩息子が帰ってきた時に駆け寄って迎えた父親の思いと同じものです。そしてそれは、神のわたしたち一人ひとりへの思いです。神がそれほど大切にしてくださっている「命」そのものを心底大事にするとき、眼の前の人が隣人になるのです。それは決して人種や立場、そういう違いによって限定されるものではないのです。主イエスは言います。

「行って、あなたがたも同じようにしなさい。」

わたしたちが誰かの隣人になることを妨げるものは何でしょうか。ただひたすら、単純に、目の前の命を見つめ、駆け寄る人間でありたいと願います。